

## 文革新用語とその政治的社会的背景

田宮昌子

文化大革命については、中国共産党中央による歴史的政治的経緯として、一九八一年六月二七日、中共第一期第六回中央委員会全体会議を通過した「关于建国以来党的若干历史问题的决议」がある。中国での文革研究及び文革への言及における文革評価は、基本的にこの「决议」の精神に則っていると云える。本文巻末に紹介される金春明等「『文革』時期怪事怪語」は、文革期の特異な社会現象を、文革新用語をキーワードに風刺の利いた批評も交えて分かりやすく解説したもの。敵家其・高舉「『文化大革命』十年史」は、文革進展過程を詳細に検証し、豊富なディテールで以って文革の経緯を再現しようとした労作である。他にも文革をめぐる研究、資料は今日までに既に数多く出されているが、本文が冒頭に言うように、いずれも政治或は歴史の観点からのものであって、中国の文化的特質を反映する民俗現象として正面から取り上げようとする周星論文はユニークな新動向といえる。とはいえ、文革終息からわずかに二十年。文革研究はまだ緒に就いたばかりで、十年の長きにわたる「特殊な時期」(本文)のあまたの事象については十分に整理されているとは言えない。日本では、わずかに加々美光行監修「中国文化大革命事典」(中国書店、一九九七)が出たばかりである。そこで本文理解の一助として、本文に登場する事象の主なものについて、その「政治或は歴史的」背景を大きく以下の四点に分けて上で略述する。なお、「」内は原文。

## 毛沢東への個人崇拜

文革期を特徴づける社会現象として、真つ先に挙げられるのが毛沢東への個人崇拜である。もちろん指導者としての毛沢東の個人的威信は文革期に始まるものではなく、一九三五年の遵義會議で中共中央政治局常務委員に就任して以来、共産党を指導して抗日戦争と国共内戦を戦う中で醸成されていたものが、一九四九年の中華人民共和国の建国という「勝利」で決定的となった。更に、この勝利が清末以来百年に及ぶ「屈辱と苦難の歴史」に終止符を打つものとして受け止められたことで、共和国の建国は単なる一党の政治的勝利ではなく、民族の独立、自尊と結び付けられ、民族の英雄、救世主という毛沢東への賛辞を生み出す精神的土壌が生まれた。しかし、そこから文革期に見られたような個人崇拜現象を作り出すには、林彪の政治的働きかけが必要であった。

林彪は、一九五九年の廬山會議で彭德懷を始めとする大躍進政策への批判に対し、毛沢東を全面的に支持。彭德懷の失脚を受けて国防部長に就任すると、軍内で毛沢東著作学習運動を積極的に展開する。この学習運動は文革発動後は全社会的に展開され、林彪の政治的地位の上昇と毛沢東の神格化は同時進行した。

その過程を大まかにまとめると、一九六〇年一月一日に「毛沢東選集」第四巻が出版され、林彪は軍内で学習運動を展開。本文中の「偉大なる著作四巻」(「雄文四巻」)は、「毛沢東選集」

全四巻を指す。一九六一年五月からは『解放軍報』紙上に毎日、毛沢東の言葉警句として一句掲載することを指示したと言われる。それらは一九六四年五月に小冊子体にまとめられて出版された。これが、いわゆる『毛主席語録』（毛主席语录）となる。始めは軍内で発行されたが、文革開始後の一九六六年二月に林彪の「再版前言」を付して大々的に発行された。「臨機応変に学び、臨機応変に運用する」（『活学活用』）は、その「再版前言」中の言葉で、「語録」の学習方針として受け取られ、広く流布した。「語録」の体裁は、通常ポケットサイズの赤いビニール表紙で、このため「赤い聖書」（『紅宝書』）と呼ばれた。「老三篇」（『老三篇』）は毛沢東の著した文章のうち、「为人民服务」（『紀念白求恩』）（『愚公移山』）の三篇を特に指し、一九六六年からやはり林彪の提唱で大々的に学習の必要性が宣伝され、広く暗記された。「雷打不動」と動じない日々を読む。「雷打不動的『天天读』」は、林彪が提唱した毛沢東著作学習運動の方法で、職場や学校で毎日一定時間、集団で「語録」などを学習するもの。一九六八年三月二六日の「毛主席的书要天天读，天天用」という林彪の発言で、軍隊を皮切りに全国に広がり、一種制度化した。「雷打不動」も林彪の言葉で、何が起ころうと動じずに毛沢東著作を学ぶという意味。「学習経験報告会」（『讲用会』）は、「毛沢東思想学習経験報告会」（『活学活用毛泽东思想讲用会』）「毛主席著作学習経験報告会」（『毛主席著作活学活用讲用会』）など、林彪が示した（『活学活用』）の学習方針で毛沢東思想・著作を学んだ経験を報告・交流する集会。「最高指示」（『最高指示』）は、やはり



春節になると「家譜」を掛け、「福」や年画を貼りかえる。毛主席の肖像は、この数十年來、ずっと農家の居間の中心に置かれている。毛沢東への個人崇拜が根強く残っている。（1999年2月山東省費県にて松岡撮影）

林彪が編み出した政治用語で、毛沢東の著作や談話など毛の言論を指す。林彪は「一句頂一万句」(理解的要執行、不理解的也要執行)と毛沢東の言論に絶対的權威を与えようとした。これが本文に言う「著作は『聖書』となり、一言一句が疑いを容れない『聖旨』となった」である。「最新指示」(最新指示)は、新たに出される毛沢東の指示、談話などを指す。通常、夜八時のラジオニュースで発表されたが、各単位には事前には通知があり、人々は放送を聞き終えると街に繰り出して、本文に見えるような祝賀パレードを繰り広げた。「最も、最も、最も」(「最も最」)も林彪の造語で、「最最最敬愛的毛主席」などのように、個人崇拜の熱狂を表現するのに使われた。一九六七年一月以降の奪権運動の中で、奪権に成功した全国各地の革命委員会から毛沢東宛に打たれた「表敬電報」(「致敬電」)に盛んに使われたことで知られる。「三つの忠実、四つの無限」「三忠于四無限」とは、「忠于毛主席、忠于毛泽东思想、忠于毛主席的无产阶级革命路线」(「对毛主席、毛泽东思想、毛主席的无产阶级革命路线无限热爱、无限信仰、无限崇拜、无限忠诚」)のことで毛沢東への個人崇拜を象徴するスローガンである。「忠」は、伝統的に君主に対する臣下の道徳として称揚されてきたものであるが、文革期には毛沢東への無批判無条件の絶対的服従が「忠」と表現された。本文に描写されている「忠の字踊り」(「忠字舞」)は「語録」に曲を付けた「語録歌」(「语录歌」)に更に振りをつけて踊ったもので、短期間ではあったが毛沢東への忠心の表現として一時大流行した。

毛沢東への崇拜から、毛を万物を養う「赤い太陽」(「红太阳」)に喩えたことは本文にも見えるが、崇拜の念を表現する行為が儀式化する中で発生した、一種の「祭壇」に当たるスペースも一説には「(红太阳)」と呼ばれたという。壁面の中央などを選んで、毛沢東の塑像が肖像画を配し、周囲を赤色のスローガンや向日葵や太陽などの絵で飾るのが基本形のようにある。この前で「朝に指示を仰ぎ、夕べに報告する」(「早请示、晚汇报」)などの儀式が行なわれた。「朝に……」では、「語録」の一節を読み上げて一日の行動指針とし、「夕べに……」では、一日の報告と反省を行なった。その際、毛沢東への忠誠の表現として、もともとは皇帝への臣下の言葉である「(「長寿の無窮たらんことを」(「万寿无疆」)「万歳」(「万岁」)「万々歳」(「万万岁」)を唱え、毛沢東への讃歌である「(「东方红」(「东方红」)「大海を行くには舵取りに頼る」(「大海航行靠舵手」)を歌うなどした。これらの祈りの言葉、讃歌は「早请示、晚汇报」を始め、会議や集会など人々が集団で行なう活動に付きものとなった。「ひまわり院」(「向阳院」)は、一つの居住単位全体で住民が政治活動に積極的に取り組むもので、以上のような活動のほか、住民内部で階級闘争も行なった。

このような毛沢東への個人崇拜から生まれたのが、文革を象徴する「(红衛兵」(「红卫兵」)である。一九六六年五月、清華大学付属中学生が結成した組織が最初であるが、同年八月一日、毛沢東は彼らを支持する手紙を書き、一八日には天安門広場で一〇〇万の紅衛兵を自ら接見した。この接見の際、毛沢東は紅衛

兵の一人が差し出した紅衛兵の腕章を着けた。こうして、紅衛兵運動は毛沢東を「赤い司令」「紅司令」として頂き、その意思を遂行するものとして権威を持つことになった。彼らは「造反有理」を掲げて既成の社会秩序を「革命」しようとしたが、その暴力・破壊行為は大きな人的、物的被害を残した。「経験交流」「大串联」運動は、文革の火を全国に広げる目的で学生に呼びかけられたもので、乗車賃、宿泊費などが無料となったため、大に行なわれた。「紅小兵」「紅小兵」は紅衛兵を真似て結成された小学生の組織。構成員の年齢が低いため、社会的政治的影響は特になかった。

これらの個人崇拜現象は、広範な国民に浸透していた毛沢東の個人的威信を林彪が政治的宣伝・運動によって熱情にまで高め、それに表現の形式を与えた結果であり、国民の積極的な呼応の結果でもある。一九七一年の林彪事件以後は、次第に鎮静化した。

### 階級、出身、血統論

文革期の社会現象を特徴づける今一つのものが「血統論」である。本文が目するように、社会主義と中国土着の文化が特殊な歴史的条件の下で相互に作用している。まず、「出身」「出身」が良い悪いとは、「出身階級」「階級出身」のことで、共和国建国以前、いわゆる解放前に属していた社会階級を指す。建国時に子供であったり、建国後に生まれた者の場合は、親の解放前の階級区分が「出身階級」となる。この場合「家庭出身」

とも言う。これに対し、本人の現在の階級的立場を「階級区分」「本人成份」と言う。これらは「檔案」という、所属機関の人事部門や党組織などに管理される個人一人一人を単位とした身上調査に記入され、本人評価の基準となった。この制度は建国以来行なわれていたが、「階級闘争」「継続革命」を掲げる文革が発動されると、社会主義革命後の社会にも資本主義階級が残存しており、それに対し階級闘争を継続する必要があるとされたため、「出身階級」「階級区分」の良くない者は闘争の対象となり、社会から排斥された。「赤い五類」「紅五類」とは、労働者、貧農下層中農、革命幹部、革命軍人、革命烈士という五種類の「良い」出身で、これに対し、地主、富農、反動分子、悪質分子、右派分子が「黒い五類」「黒五類」とされ、階級闘争の対象となった。このように、これらの「階級」は純粹に経済的な所有や雇用形態によるものではなく、加々美光行氏「資料 中国文化大革命——出身血統主義をめぐる論争——」が指摘するように、論功行賞と懲罰の色彩を帯びている。

この出身問題が紅衛兵運動において「血統論」「血統論」に発展した。紅衛兵運動の主体は十代の中学生たちであったが、親の「階級区分」、即ち自分たちの「出身」を問題にした。紅衛兵運動自体が「紅五類」を自任する中学生によって始められたものであり、「黒五類」の子弟を「犬の子」「狗崽子」と呼んで「革命」に参加する権利を認めず、紅衛兵組織から排除した。これは「革命性」を血縁によって世襲しようとするもので、一方生まれによって差別される政治的賤民を作り出すものであつ

た。この「血統論」を象徴するのが、「親父が英雄なら息子は好漢、親父が反動なら息子はろくでなし」「老子英雄儿好汉、老子反动儿混蛋」である。これは一九六六年七月二十九日に北京航空学院付属中学の紅衛兵が張り出した対聯が最初であると言われているが、大論争となり、いわゆる紅衛兵世代である青少年の間に激しい対立を巻き起こした。出身に問題のある子女は、特に初期には紅衛兵運動に加われなかったが、別途「赤い外郭団体」「紅外圍」を形成した。その後、批判・闘争対象が党内の走資派に向けられていくにつれ、「紅五美」の子女たちの多くも「狗崽子」「黑帮子女」に身を落した。「教育によりよくなる見込みのある子女」「可以教育好的子女」は、このような局面への対策として、親に政治的問題のある子女を指す新呼称として、毛沢東が一九六八年二月二十六日「关于对敌斗争中应注意掌握政策的通知」の中で提起したもの。「一線を画す」「划清界线」は、このように家族に政治的問題がある者が公開の場でその家族を批判し、家庭と「一線を画」して「革命」の側に付くという自分の態度を表明すること。多くの人々が職場などの所属単位から肉親に対する「划清界线」を迫られた。政治が家庭内にまで浸入し、個人一人一人に働きかけた時代を象徴するものといえる。

遇羅克の「出身論」(「遇罗克《出身论》」)は、この「血統論」をその初期の段階で正面から批判した論文。一九六七年一月に「中学文革報」に掲載され、大きな反響を呼んだ。文革を攻撃する反動的的文章とされ、批判闘争、逮捕の末、一九七〇年三月五

日処刑された。文革終息後、名誉回復されている。

### プロレタリア階級独裁

文革期、残酷な暴力が横行したことは広く知られているが、当時それは「革命」行為として行なわれたものであった。なぜ、そのような事態に陥ったかについては、これまでに政治学や社会心理学など様々な観点から考察が加えられている。ここでは深く立ち入ることができないが、まず有名な「革命不是请客吃饭……革命是暴动，是一个阶级推翻一个阶级的暴烈行动」という毛沢東による革命の定義がある。これは一九二〇年代、毛の政治生涯の初期における「語録」であるが、文革期に広く流布し、造反の免罪符のような働きをした。また、文革の推進理論である毛沢東の継統革命論では、社会主義政権が成立した後もイデオロギー上のブルジョア階級は依然として存在するとされ、そのため、「团结—批评—团结」を旨とする「人民内部の矛盾」の他に、「专政」で対処すると定義されている。「階級敵」も社会内部に存在することになった。一九六六年八月八日、文革の指導綱領となる「关于无产阶级文化大革命的決定」、いわゆる「十六条」(「十六条」)が中央の全体会議で採択されたが、紅衛兵の造反行為を肯定し、運動の目的を「資本主義の道を歩む実権派の打倒」「ブルジョア階級の反動的學術權威の批判」「ブルジョア階級とあらゆる搾取階級のイデオロギーの批判」とした。本文にある「砲撃せよ」「砲打」は、一九六六年八月七日に公表された毛沢東の「砲打司令部—我的一張大字報」に由来し、文革中、

幹部や組織への批判攻撃の意味で使われた。これらの文章の論調は、党中央にブルジョア階級とプロレタリア階級の二つの司令部がある、つまり党内上層部に階級闘争が存在するとして階級敵への攻撃を呼びかけるもので、「一个階級推翻一个階級的暴烈行动」が国家上層部から末端までの各段階の既存指導権に対して展開されることになった。

こうして、ブルジョア階級司令部から実権を奪い返し、プロレタリア階級独裁の下で革命を継続する（无产阶级专政下继续革命）ことが、文革の目的となった。「四大武器」（四大）は、その造反（造反）—奪権（夺权）の手段として提唱されたもので、具体的内容は「大鳴」（大いに意見を出す）（大放）（大いに討論する）（大辩论）（大いに弁論する）（大字报）（大字報を張り出す）である。「魂に触れる」（触及灵魂）は、一九六六年六月二日の『人民日报』社説「触及灵魂的大革命」から出た語で、文革のあるべき本質を示すスローガンとして広く浸透した。徹底的な自己解剖による思想改造を目指すのであるが、批判・闘争対象とされた人々には暴力を用いてこれを迫ることもなかった。

「妖怪変化」（牛鬼蛇神）は、もともと種々の訳の分からないもの、ひいては悪人を指す語であったが、一九六六年六月一日の『人民日报』社説「横扫一切牛鬼蛇神」以後、特別な政治用語となり、政治的に問題があると見なされた人々を指して広く使われた。「牛小屋」（牛棚）は「牛鬼蛇神棚」を意味しており、「牛鬼蛇神」と見なされた人々が、造反派によって法律的手続き

もなく一方的強制的に監禁された場所である。設置された場所や形式は様々であった。これら「牛鬼蛇神」は、「触及灵魂的大革命」を行なうために、造反派によって批判闘争大会（批斗会）にかけられた。罪行を告発し、罪を認めさせるのが主旨であるが、本文に出てくる「罪状札」（黑牌）を首に掛けさせる（時には、重い札を細い針金で首に掛けるなど、単なる侮辱ではなく体罰の意図もある）、頭髮を真中から半分そり落とす「陰陽頭」（阴阳头）にする、「三角帽」（高帽）を被せる、腰を前向きに深く折り両腕を後ろにねじ上げる所謂「ジェット式」（喷气式）の姿勢を取らせる、ガラス片や洗濯板の上に跪かせる、殴る蹴る等の侮辱と虐待が加えられるのが常であった。その後、トラツクの荷台などに「黑牌」（阴阳头）（高帽）姿のまま乗せ、「市街を引き回して見世物にする」（游街示众）ということも行なわれた。

奪権は、一九七四年一月初めの上海での市委員会の奪権成功を皮切りに全国規模で急速に展開。一月三十一日、黒龍江省に最初の省レベルの革命委員会が成立したのを始めに、従来の党と政府の指導権を打倒し、革命委員会を設立するという形で行なわれた。翌一九六八年九月五日、台湾省を除く全国二九の省、市、自治区全てに革命委員会が成立した。これを祝して九月七日『人民日报』「解放軍報」は社説を発表したが、「全国の山河は赤一色」（全国山河一片红）はその中で全国的奪権の完了を指して使われた表現。奪権闘争の展開の中で武闘（武斗）も激化した。「三つの支持、二つの軍事」（三支两军）は、武闘を押さ

え、左派の奪権を支援するために出された政策で、解放軍を本格的に文革に介入させ、「支左」「支农」「支工」「军官」「军训」の任務を遂行させたもの。実質的には非常事態における軍事管制であった。

## 毛沢東のユートピア

文革の発動を毛沢東によるユートピア建設の試みとする理解は広く行なわれている。本文中に言う「千年王国」とは、もともとは初期キリスト教のメシア待望に起源を持ち、そのメシア王国が千年続くこととされている。今では文化人類学の術語として、広く非キリスト教圏を含め、救世主待望、現世でのユートピアの実現、信者による集団的享受などの特徴を持つた宗教(的)運動を指して用いられている。「大同」は、戦国末から秦・漢にかけて成立したとされる「礼記」の「礼運篇」が典拠。中国伝統におけるユートピア思想として理解されている。その内容は「天下為公」の一語に集約できる。「大同」の世界には、家という社会単位が存在せず、子育てや養老が社会共同で行なわれ、私有制が存在せず、故に泥棒もない。現代の概念で理解すれば、原始共产制ともいえる社会で、古に存在した理想社会として後世に影響を与え続けたが、特に近代に入ってから、太平天国の洪秀全、三民主義の孫文、「大同思想」の康有為らへの影響が有名である。「ブルジョア階級の特権」(「資産階級法権」)は、文革期にはブルジョア階級の経済的基礎として批判・攻撃的となったが、マルクス、レーニンの著作におけ

る原義を正確に反映していない訳語であるとして、文革後に「ブルジョア階級の権利」「資産階級権利」と正式に改められた。もともとマルクス・レーニン主義においては、共産主義段階での「必要に応じた分配」を実現する前段階である社会主義段階では依然として、資本主義段階のものである「労働に応じた分配」を実施せざるを得ないとしている。この労働の等価交換の原則を表わす語が「資産階級法権」と訳されたことが、「労働に応じた分配」自体が社会主義社会内部にブルジョア階級を生み出す要因となるという毛沢東の発想を生み、この「法権」を否定しようとした文革期の政策を生んだと言われる。

五・七指示(「五七指示」)は、毛沢東が文革を通して目指そうとする理想社会の青写真を示したものと考えられた。一九六六年五月七日に書かれたことからこう呼ばれる。原文はごく短い簡潔なもので、本文に紹介されているのがほとんど全内容であるが、「分業の否定」「学校化」「平均主義」の他、政治教育・階級闘争の重視、軍事教練・肉体労働の教育的効果の重視、既存教育制度の否定などが読み取れる。

また、「五七指示」には現われないが、毛沢東の一連の政策には、「公」と「私」の対立、或いは「私」の否定(「公」)が是であり、「私」が非であるという)も指摘できる。「私」領域の不道德性は、「大同」観だけでなく、中国の伝統的価値全般にほぼ共通してみられるともいえるが、社会主義理論における「私有」に対する「公有」の価値偏重(本文参照)と伝統的価値体系における「私」に対する「公」のそれとがここでも相互作用し

ているように思われる。文革の思想領域における根本的綱領とされた「私心と闘い、修正主義を批判する」「斗私批修」や、当時強い影響力を持った「私」の念がちらつと過ぎるのを暴き出す「狼挖私字二閃念」などのスローガン、個人利益の追求だけでなく、プライバシー保有の欲求もブルジョア階級格として否定されたこと、本文に言う「個人主義は常に封建主義や資本主義、修正主義と結びつけられた」等も、このような「私」観を背景に持つものと考えられる。

毛沢東時代、社会の各領域で行なわれた「革命」を見てみると、農村では、文革前からすでに集団化（共産化の試行）が行なわれ、一九五八年に合作社の人民公社化が実施されていた。人民公社化を推進した際の謳い文句であった「一に大きく、二に共産的」の原文（「一大二公」）の「公」にも上述の二重の意味が含まれていると見てよいであろう。本文に言う「共同炊事」「大锅飯」も、この人民公社化の中で実施されたもので、農民の家庭ごとの調理・食事を廃止し、共同食堂での食事とした。農民は農作業後の家事労働から解放されるが、集団労働・集団生活が推し進められ、私的領域が大幅に減少。共同食堂は多大な浪費をもたらし、一九六一年には実質的に中止された。共産化の嵐「共产風」は、「大锅飯」を始め、当時の極端な共産化の動きを指して言う。農村においても政治学習・運動を積極的に展開することが奨励されたが、その中で「小靳莊（小靳庄）」は、文革後期の批林批孔運動の中で江青によってモデルケースに仕立て上げられたもの。村内の労働力の多くが恒常的に政治活動

に動員されていたため、解放軍などを投入して農業生産を支えていたと言う。本文にある「芝居」とは、江青が推進した「革命模範劇」（样板戏）のこと。医療分野では、「裸足の医者」（赤脚医生）が文革期の新生事物、医学教育革命の成果として大いに宣伝された。彼らは半農半医の衛生員で、農村で生産活動に従事する傍ら、初歩的な医療活動や保健活動を行なった。軍では、一九六五年に「階級制」（军衔制）が廃止され、工業分野では、「七・二二大学」（七二一大学）が一九六八年七月二一日に出た毛沢東の教育革命に関する指示に応じて全国に設置された。この指示は、実践経験のある労働者や農民が学校で専門知識を学び、再び生産現場に戻るといふ人材育成手段を奨励したものである。

「五七指示」に明言されているように、毛沢東は解放前だけでなく、文革発動までの所謂「十七年教育」をも含めた既存教育制度を否定した。建国以前の教育はブルジョア階級の教育であり、建国後の教育は劉少奇の修正主義路線の教育とされた。知識分子はこれら二種類のいずれかによって教育された人間であり、必然的にブルジョアの階級思想を持っていることになった。こうして「資産階級知識分子」という思想改造の必要性を持った階級が存在することになった。本文が言う「毛は……知識分子をブルジョア階級に分類した」は、このことを指す。文革は思想、文化の革命を目指すのであるから、教育革命と知識分子の「再教育」（再教育）が重要な課題となった。「社会に学ぶ」「开门办学」は、「学校の門を開けて学ぶ」ということで、教育



革命の重要な手段となった。学校から社会（工場や農村）に出る、社会（労働者や農民）が学校に来るといふ二方向で行なわれ、教師も学生も共に労働者及び農民に学んで、思想改造することが望まれた。「農村定住」運動（上山下乡）は、都市部の「知識青年」（中等教育を受けた青年）の再教育の方法。文革以前から行なわれてはいたが、一九六八年一月二十二日「人民日报」に発表された毛沢東の指示「知識青年が農村へ行き、貧農下層中農の再教育を受けることは大変必要なことである」によって、熱狂的な運動となった。実質的には、文革発動以来、正規学校教育システムが停止状態に陥ったことによつて都市に溜まっていく一方であつた初級高級中学卒業生対策であつた側面がある。「五七幹部学校」（「五七干校」）は、行政機関幹部や教員などが送られた再教育施設。概ね辺鄙で貧しい地域に設けられ、政治学習と肉体労働を課した。「五七指示」に依つて設置されたため、こう名づけられた。

「昔の苦しみを想い、今の幸せを知る」（「忆苦思甜」）は、文革中盛んに行なわれた思想教育の一方方法で、「解放」前を模した粗末な食事をしたり、体験談を聞いたりして、「解放」の有り難味を知り、革命を擁護する心を培おうとするもの。

本文中の「専」（専）と「紅」（紅）の対立、或いは「専」に対する「紅」の「価値偏重」も、「分業」の否定の他、政治教育・階級闘争の重視の点から理解できる。「専」はある特定の分野に対する専念、專業化とそこから来る政治との距離を指す。

「紅」でないということから、「白専」とも言われた。「黒」ほど

決定的ではないが、否定的価値であることは確かである。封建王朝の文人にはまだ可能であつた学問や文学への逃避の道も文革期には閉ざされていたことになる。

#### 主な参考文献

（中文）

中共中央文献研究室「関于建国以来党的若干历史问题的决议（注釈本）」人民出版社、一九八六年

金春明等「文革」時期怪事怪語」求实出版社、一九八九年

戴家其「高舉「文化大革命」十年史」（最新増訂版）潮流出版社、一九八九年

巢峰主編「文化大革命」詞典」港龍出版社、一九九三年

毛信德「当代中国詞庫」航空工業出版社、一九九三年

「中華人民共和国大綱」中国经济出版社、一九九四年

（日文）

加々美光行「資料 中国文化大革命——出身血統主義をめぐる論争——」りくえつ、一九八〇年

加々美光行編「現代中国の挫折 文化大革命の省察」アジア経済研究所、一九八五年

加々美光行編「現代中国のゆくえ 文化大革命の省察Ⅱ」アジア経済研究所、一九八六年

楊克林編著「中国文化大革命博物館」柏書房、一九九六年

加々美光行監修「中国文化大革命事典」中国書店、一九九七年